



公益財団法人
日本体育協会

総合型地域スポーツクラブ 公式メールマガジン

平成27年度 総集編

2. 座談会

座談会テーマ

「総合型地域スポーツクラブへの障がい者
スポーツの導入」



スポーツ振興くじ助成事業



公益財団法人
日本体育協会

INDEX

2. 座談会企画

■「総合型地域スポーツクラブへの障がい者スポーツの導入」

Part.1 [第115号(平成27年5月20日発行)]

- ◎総合型地域スポーツクラブの理念。これまでの取り組み……………3
- ◎障がい者スポーツを巡る課題。日常的な活動を巡って……………5
- ◎文部科学省委託事業
「地域のスポーツクラブにおける障がい者スポーツの導入」事業の具体的な取り組みと成果と課題……………7

Part.2 [第116号(平成27年6月22日発行)]

- ◎総合型地域スポーツクラブに障がい児・者を受け入れることの意義……………9
- ◎2020年パラリンピックの開催と総合型地域スポーツクラブの使命・期待……………11
- ◎総合型地域スポーツクラブのこれから。お互いを支え合う力……………13

◆座談会出席者◆

松尾 哲矢氏(立教大学コミュニティ福祉学部教授)／
「地域のスポーツクラブにおける障がい者スポーツの導入」事業協力者会議座長)

大日方邦子氏(パラリンピック金メダリスト[アルペンスキー]／
電通パブリック リレーションズ コンサルタント)

増田 康太氏(NPO法人クラブしっきーずクラブマネジャー)

戸沼 智貴氏(NPO法人高津総合型スポーツクラブSELF 企画・広報担当)

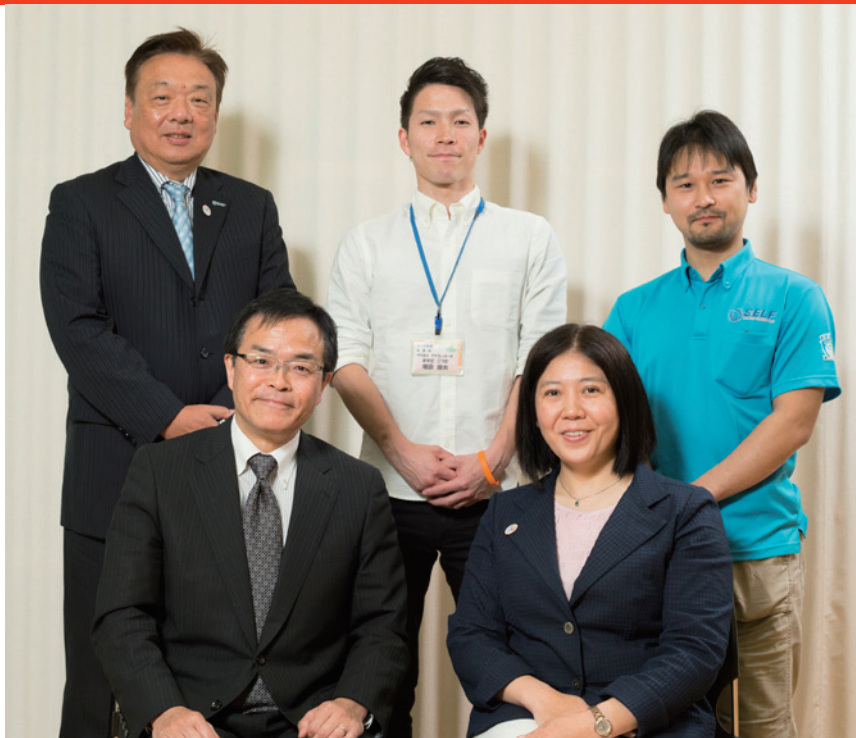
菊地 正氏(NPO法人高津総合型スポーツクラブSELF 副理事長)／
総合型地域スポーツクラブ公式メールマガジン編集長)

総合型地域スポーツクラブへの障がい者スポーツの導入 Part.1

平成26年度、公益財団法人日本レクリエーション協会が、文部科学省からの委託を受け、「地域のスポーツクラブにおける障がい者スポーツの導入」事業を実施しました。この事業は、総合型クラブで障がい者の方々を受け入れ、スポーツ教室を開催し、クラブが自ら障がい者を受け入れることができるよう、ノウハウを身に付けていただくモデル事業でした。そして、この事業をまとめたガイドブックが発行されたことを受け、これらの情報を広く発信するため、障がい者スポーツに携わる皆さんにお集まりいただきお話を伺いました。

1

総合型地域スポーツクラブの理念。これまでの取り組み



【写真後列(左から)】菊地正氏、増田康太氏、戸沼智貴氏 【前列(左から)】松尾哲矢氏、大日方邦子氏

| 対談者 |

松尾哲矢氏
立教大学コミュニティ福祉学部教授
「地域のスポーツクラブにおける障がい者スポーツの導入」事業協力者会議座長

大日方邦子氏
パラリンピック金メダリスト(アルペンスキー)
電通パブリックリレーションズ コンサルタント

増田康太氏
NPO法人クラブしっきーず
クラブマネジャー

戸沼智貴氏
NPO法人高津総合型スポーツクラブ
SELF
企画・広報担当

菊地正氏
NPO法人高津総合型スポーツクラブ
SELF
副理事長
総合型地域スポーツクラブ
公式メールマガジン 編集長

地域との接点を持つ
それが一つのキーワード

松尾(敬称略) 最初に総合型地域スポーツクラブの基本的な考え方で、これまで障がい者スポーツに対してどんな取り組みをしてきたのかについてお話してください。

戸沼 「SELF」が障がい者スポーツと銘打ってやり始めたのは2〜3年前です。きっかけは県立養護学校の先生との出会いでした。その時に障がい者の方の卒業後の人生についてお聞きしたのですが、肥満、活動の場がない、地域との接点がないなどいろいろな課題がありました。

受け入れのためのノウハウもなかったのですが、2年ほどかけて体制を整えました。最初は障がい者スポーツについてある程度知識のある方に、素晴らしいプログラムをやっていただきました。しかし、それを継続すると、講師の方の謝金など問題が出てきました。そこで、地域の人ができるプログラムはないかと考え、それが「SELFハートクラブ」という形で始めました。最初はトイレや導線はどうしようと思ったのですが、それもみんな受けて入れてやってい



松尾哲矢

たところ、「うちでやることももちろんであります。それはそれでいいのですが、できれば地域でそういう場所を作ってくれたらありがたい」という話になりました。そこで、SELFが施設をお借りしている地域の中学校にご理解いただき、競技型スポーツではなく、体を動かしたり、人と出会ったり、普段と違う空気を感ぜられる場を作りました。

菊地 障がい者の方は、家庭と学校など、ある意味守られた世界にいるため、養護学校からの「ぜひ地域で受け入れてほしい」というのは、かなりキーワードだと思いましたがね。参加できる当事者の喜びとご家族の喜びは想像を絶するほど大きいもので、外へ出ると我々の何十倍も笑顔と元気さを見せています。うちは毎週土曜日に行っているのですが、皆さん絶対に休まないで来てくれます。

戸沼 県立養護学校の地域ネットワーク推進会議というのが神奈川県にはあるんですけど、その中に入っているのはやっています。例えば、養護学校の卒業式に我々も来賓として出席し紹介してもらったことよって、保護者の方々にも地域にそういう場があるということ伝えることができています。我々は運良く自然の流れでそうになりました。

増田 「しつきーず」は市内の小学校のボランティアルームに事務局を置き、誰でも参加できる開かれたクラブを目指して発足しました。ちなみにその時、僕は小学4年生、平成11年頃のことです。当時のプログラム部長が自分の母(現理事長)でした。そのボランティアルームで障がいのある子どもたちや、小中学校に通っている子どもたちが交流しているうちに、いろいろなニーズが出てきたんです。例えば、特別支援学校に通っている障がいのある



増田康太



戸沼智貴

お嬢さんの、「泳ぎたいので、一緒に泳いでください」という小さな一声から始まったと思います。そうすると、そのお母さんも含めた地域の方々がボランティアとして、機織りや折り紙などいろいろなことを普通学級の小学生に教えたりと、ぐるぐる回っていったんですね。

そして、5年、10年と過ぎてその子たちが社会に出て行き、務めた先の事業所などで仕事をしていると、さらにニーズが増えるわけです。彼ら、彼女たちが20歳、30歳と年齢を重ねていった時に、事業所の所長さんから「肥満が深刻だ」といった話も出てきました。そんな時に地域にスポーツやレクリエーションをコミュニケーションツールとして活動しているクラブはないものかという話から、しつきーずがあるじゃないかとなって、10年くらい経ちました。ボランティアの中には、自分の健康づくりのために太極拳を楽しんでいる人も多く、それこそ障がいのある方が飛び跳ねたりした時にどうしたらいいのか分からないということがありました。しかし、60代、70代、80代のシニアの方には孫の子育て中だから、何となく通じる瞬間が出てくるわけです。その瞬間に障がい者として見ている半面、少しづつ肩の力が抜けてきて、さりげなく接することができるようになりました。でも、反省することもあって、それを事業所の職員さんとミーティングを繰り返して、1か月ごとに積み重ねていった結果、今は皆さん何となく、「○○ちゃんはこういうふうにするところなるから、じゃあこういうふうにしてみようかしら」という、そんなシニアさんが生まれてきています。

CLUB for ALL
地域スポーツクラブへの
障がい者スポーツ導入
(ガイドブック)



全国に約3,500ある総合型地域スポーツクラブの中から、地域性や障がい者スポーツへの取り組み実績の有無を勘案して9クラブをモデルクラブに選定。本冊子は、今回の事業活動を通じて浮かび上がった実践のためのヒントや課題などを総合型クラブ向けのガイドブックにまとめたものです。

2 障がい者スポーツを巡る課題。 日常的な活動を巡って



障がい者と見るのではなく
人として見るのが大切

菊地 たまたまSELFの周りには、市立の中央支援学校、中学校が2つ、小学校が3つと県立の養護学校があります。そして、地域で6校連のネットワークを組んでいます。ですから、中央支援学校は、小中学校のPTAさんを中心にフェスティバルや、いろいろな活動ができるステージが作られています。

大日方 支援学校のお子さんは多いのですか？

戸沼 今、うちは10〜15人くらいが会員となっています。我々の方針として、多くの人を受け入れないというわけではないのですが、一つの団体で大人数となるといろいろな面で大変になってきます。しかし、10人くらいを2〜3人で見ると増やしていければと考えています。

大日方 特別支援学校ですとかかなり遠い所からも通われるので、どうしても家から目的地である学校に行って帰ってきてという生活に



菊地 正

なってしまう。そして、そこでの生活が終わると突然居場所を失ってしまいます。ですから、スポーツを通じて地域のつながりを作るのはすごく重要だと思います。

また、お話を聞きまして逆に人数が少ないのはいいことだと思っただんですね。どうしても障がいのある人たちだけで完結させられると、ある種の閉塞感だったり、新しい刺激が入りづらい傾向があります。そういう中で障がいがあるなしにかかわらず地域の人と連携するには、少人数の方がうまくつながるのだと思います。

松尾 自宅と学校との距離が遠いこともあって、学校周辺の地域だけでなく、自宅周辺の地域での活動が重要になってくるんですね。

大日方 受け入れてもらえるネットワークがあればいいですね。



大日方邦子

ただ、なかなか周りとうどう接しているのか分らないというのがありますね。そのことがいけないというのではなく、私も知的障がいのあるお子さんと一緒にスキーをすることがよくありますが、そのお子さんが突然思わぬ行動をとって、その理由が分からない時があるんですね。その時に分からないことを押し殺してしまうより、分からないのが当たり前だから、分からないことは周りの人にどんどん聞けばいいし、もしかしたら本人に聞いた方がいい時もあるんですよ。

それもちよっとしたコツというか、コミュニケーションなんです。それは接するから分かることで、私も最初は聞けませんでした。でも、直接聞いた方が早いと思って聞いてみたら、その方の場合は教えてくれました。接する回数が増えれば、見えてくることもあるんです。

戸沼 正にその通りです。子育ても同じだろうし、我々が総合型クラブで子どもたちを見ているのも同じことです。障がい者となると、障がいしか見ないで、その人自身を見ない。そこが問題ですよ。

松尾 この話はすごく深いと思います。江戸時代から「福子の思想」という、障がいのある子どもさんが生まれてくると幸せになるといいう言い伝えがあります。なぜかというところ、その人を中心にしてみんなが力を合わせて何とかしていこうとするから、その家は豊かになるといいうのです。その福子の人がいれば、みんなが守るわけです。ところが明治以降学校制度ができて、一人の先生が多くの子どもたちを面倒見なければならなくなつた時に、特別な支援が必要な、違う行動をとる子と一緒になかなか難しくなつたわけです。そこで、その子たちを集めて学級を作るか、あるいは学校を作るかとなつたのです。

ある意味、分らないことを分らないまま過ごさせてきたのは、実を言うと学校制度や近代社会が作ってきたものなのです。逆に言うとそれをもう一回戻すとい

うんですかね、あるべき姿に戻していくプロセスがものすごく求められるのだらうと思います。それが今、大日方さんもおっしゃっているように最初の声掛けをどうすればいいのかということにつながってくるわけです。

菊地 うちのクラブの子どもたちは一緒に卓球をやったり、ダンスをやったりしますが、まったく問題なくやります。

大日方 1対1の子ども同士だと偏見がないんですね。

戸沼 大人はどうしても障がいのある子どもを見ると、良くも悪くも何かしてあげようと思うのです。でも、それは余計なお世話で、子ども同士であればお互いに行きるところを見て、「お前すごいな」となります。

松尾 学校制度の話ではないですけど、健常の子どもと障がいのある子どもと一緒に何かするということがないですよ。

大日方 少ないですよ。私も文科省の方といろいろお話することが多いのですが、特別学級、特別

支援校という形が教育としてはある方が、いわゆる教育の質という意味においてはいいんです。しかし一方で、特別視し過ぎるのはいけないのだとも思うんですね。普通の学校の中に特別支援学級が併設されている所を私も見学させていただきましたが、登下校時に接触があったりすると危ないから学校の玄関を別々に分けていますと。それを聞いた時に、正直、そこまで分けなくてもいいのではないかと思います。

それこそ地域に出れば当たり前なので、さっきのお話じゃないですけど、一人の人として見ることでできるかどうかと考えた時に、この人は特別支援学級で人口も出口も別の所で、でも、同じ学校なんですと言われても多分あまり接点は感じにくいですよ。ある種、大人の配慮、大人の考え方だと思えます。子どもは一緒に生活していれば人として、お友達として見ると思うんです。それができるのが教育だと思います。授業のカリキュラムの中で、算数や国語などの授業を仮に別にした方がいいとなつても、つながれるのはスポーツだと思えます。一緒に体を動かして、接点を作ることがすごく大切ですよ。

3

文部科学省委託事業「地域のスポーツクラブにおける障がい者スポーツの導入」事業の具体的な取り組みと成果と課題



指導者と地域の人たちの相互理解が必要

増田 今回、文科省のモデル事業を行うに当たって、スタッフに若者も入れてやってみようとなりました。実はしつきーずが発足した当時の小学生たちがちょうど25〜26歳になったので、今回の事業のサポートスタッフのような形で戻ってきました。

参加者(障がい者)の中には、小学校時代の同級生の女の子がいました。僕が通った小学校には、特別支援学級みたいなクラスはなかったのですが、彼女も普通学級で一緒に6年間育ったんです。ゴールデンエイジと呼ばれる幼少期に障がいがある子と一緒に成長したので、障がいのある方が何かした時に驚いたりはしません。鉄は熱いうちに打て、じゃないですけど、小学生の時にそういう経験があったから、障がい者としてというより僕は一人の女の子として見ています。

松尾 今回の取り組みでチャレンジしてみようとしたのは、具体的にどこなところでしたか？

戸沼 一番必要なのは地域でつなが

ることと、一般の方の障がい者に対する怖さを取り除くことです。その支援が大事で、そのためのマニュアルを作ろうということが、今回チャレンジしたことです。

菊地 きっかけ作りをマニュアルで皆さんにご理解いただくということですね。強引でも何でも、ともかく引っ張って1回現場に来てもらうというところまでいけば、ほとんど9割は終わるのかなと感じました。

戸沼 その時に考えたのはSELFらしさとは何だろうと、それがそのまま総合型スポーツクラブらしさにもつながると思います。簡単に言うと、地域のみんなのできることをやるということなんです。

菊地 増田さんの所と同じように小学生の時にSELFに入ってきて、大学卒業後にSELFに就職した女の子もいます。要はこの子たちを中心にやっているんですが、何となく半分子どもで半分大人みたいな子たちなので、子どもたちが自然に入っていける良さをそのまま出してくれています。そして、少しずつ勉強をしながら覚えていき、彼らが担ってくれますごくいい形になっています。



松尾

2020年にパラリンピックスが日本にやってくると思います。僕たちもそれを支えようと思っていますが、これまで専門家が自負を持ってやってこられたわけですから、簡単に言うなという思いは随分あると思います。ましてや最初から制度化されたり、マニュアル化されていたわけではないわけで、ものすごく苦労があった中でのことですからね。これからパラリンピックスを迎えるに当たって障がい者スポーツをどんどん広げていこうとする時に、まずは専門家の意見を聞く姿勢が大事だよというのが

一つありますね。

大日方 「専門家と一緒にやっていきたいんです」ということを言い続けることですよ。

松尾 そういった意味では今回、この事業が大事だったと思うのは、日本レクリエーション協会は、日本障がい者スポーツ協会と日本体育協会が一緒になって、日本体育協会で総合型地域スポーツクラブを選んでいただき、日本障がい者スポーツ協会から指導者の方を派遣しましょう、全体の運営は日本レクリエーション協会で行いましょうという仕組みを取ったことです。各団体がそれぞれの専門性を生かし、協力して事業を展開する仕組みづくりとつながりづくりが大切です。

戸沼 こちらとしても新たに「なるほど」と思うことも教えていただけるし、専門でやっている方にも地域で考えてやっていることを分かっていたいただける。相互理解ができます。

増田 今回の事業は金曜日の夜7時半から9時半ぐらいまでの2時間行いました。いつもは小学校の体育館で、自分たちでバスケットボールやス

ポンジボールを使ったサッカーを、障がいのある方も一緒に参加して何となくやっているんです。

ところが、今回、指導者の方に来ていただいた時にサポータースタッフの若者たちが、自分たちはどの立ち位置でやればいいんだというのが分からなくなってしまうんです。今まで、しつこく参加したことのない障害のある方にも新たに声掛けをしたことにより、いつも来ていた人数より数名増えたんです。そうなる時に顔見知りには声を掛けられても、新たな参加者には声を掛けられないこともあり、若者たちが端の方でバスケットをしていたりする。そうすると指導者の方も「あの若者は…」となって、お互いにある程度の感情を持たない状況になってしまいました。

そこで、第3回目が始まる前に指導者の方々にクラブハウスに来ていただいて、僕と理事長から「スポーツの競技向上を目指しているのではなく、障がいのある方たち、若者たち、見に来ている障がい者のお父さんお母さん、その人たち全体で会話したりくつろいだりする、そういうたまり場を作っていくのがクラブの理念としてはあるんです」と1時間くらいかけて伝えました。そして、「今回来ているスタッフ



の若者たちも障がい者スポーツ指導員になりたくて入ったわけではなく、昔遊んだ小学校で遊びながら障がい者をサポートしているんです。そこは温かく見守ってください」と話をしたら、理解していただき、それからうまくいきました。

松尾 指導者の方もあるイメージを持ってお見えになりますからね。

増田 ミーティングをやった本当に良かったと思います。

※座談会の続きは次号で掲載します。

総合型地域スポーツクラブへの 障がい者スポーツの導入 Part.2

平成26年度、公益財団法人日本レクリエーション協会が文部科学省からの委託を受け、公益財団法人日本体育協会と公益財団法人日本障がい者スポーツ協会の三者が連携して実施した「地域のスポーツクラブにおける障がい者スポーツの導入」。そのモデル事業として、全国9つの総合型クラブが実際に障がい者の方々を受け入れ、スポーツ教室を開催しました。そして、その事業をまとめたガイドブックが発行されたのを受け、これらの情報を広く発信するため、障がい者スポーツに携わる皆さんにお集まりいただき座談会を行いました。今回は先月号に続きその第2弾として、総合型クラブの使命や2020年東京オリンピック・パラリンピックまでの5年に成すべきことなどを率直に語っていただきました。

4

総合型地域スポーツクラブに 障がい児・者を受け入れることの意義



[写真後列(左から)] 菊地正氏、増田康太氏、戸沼智貴氏 [前列(左から)] 松尾哲矢氏、大日方邦子氏

| 対談者 |

松尾哲矢氏

立教大学コミュニティ福祉学部教授
「地域のスポーツクラブにおける障がい者
スポーツの導入」事業協力者会議座長

大日方邦子氏

パラリンピック金メダリスト(アルペンスキー)
電通パブリックリレーションズ コンサルタント

増田康太氏

NPO法人クラブしっけーず
クラブマネジャー

戸沼智貴氏

NPO法人高津総合型スポーツクラブ
SELF
企画・広報担当

菊地正氏

NPO法人高津総合型スポーツクラブ
SELF
副理事長
総合型地域スポーツクラブ
公式メールマガジン 編集長

老若男女のコミュニティ
それが総合型クラブの役割

松尾(敬称略) 総合型地域スポーツクラブで一番重要なのは、コートから離れたところの活動です。例えば、ミーティングをしたり、みんなでお茶を飲みながらおしゃべりをする空間づくりが大切で、それこそがクラブワークだと言われています。そこでお聞きしたいのですが、障がいのある方を総合型地域スポーツクラブで受け入れる時、コート外ではどんな工夫をしていますか？

戸沼 支援をしましょうとか、みんなで助けてあげましょうというのは一方通行になってしまうことがあります。そういうことではなくて、一緒に「機会」をつくりましょうという話をするようにしていきます。一緒に楽しめる場をつくりましょうということですね。

菊地 これは障がい者とか健常者に関係なくクラブづくりの原点で、会員には幼児から高齢者の方までいます。その中で全体のコミュニケーションをどう取っていくかというのが、総合型クラブの大事な基本の部分です。特にうちで感じるのは、障がいのある方のお父さん、お母さんは、皆さん非常

に積極的で前向きな方が多く、自分たちで学校の中にダンスクラブをつくったり、リーダー的な役割をする方もいます。

我々がこれから地域に拠点を一つ一つとっていくには、我々の力だけでは限界があります。その中でそういったクラブを活用して、小さくてもいいからチャンスをつくっていきという形が見え始めています。総合型クラブとしては、ご家族やサポートしてくれる方たちのコミュニティを作っていきたいですね。

松尾 コミュニティづくりは、簡単にはできないのではないですか？

菊地 コミュニティと言っても立ち話ができる、そういうのもいいと思うのです。例えば、1週間に1回クラブに来て肩を回したり、寝転がって足を回したり、終わったらみんなでおしゃべりをする。そういう場づくりをクラブができればいいなと思うんですよ。子どもたちも学校の部活が終わってからは、夜、うちのクラブに常に300人くらいが集まってきました。もちろんその子たちのうまくなりたいという気持ちも大事ですけど、お父さん、お母さんの理解の下、夜、外に出て友達と遊べる

のが魅力で、それが正に小学生にとってのコミュニティなんです。ですから、競技スポーツとして技術を磨く専門家の指導者よりも、楽しみながら遊んでくれて面倒を見てくれるおじさんがいた方がいいんです。そして、結果的に種目が増えていくという感覚でやっていければいいのだと思います。

戸沼 「この時間は必ずこれをやってください」という方向ではないです。そこに集まったお母さんたちが「こういうのがいいですよね」「ではそれをやりましょう」という、引き出しを増やすことを意識しています。

松尾 お話を聞いてみると、SELFさんはすごくうまくいっているようですが、実際に進めていく上で一番の課題は何ですか？

菊地 やりたいと言っても協力者がいないということです。

戸沼 今、抱えている課題は広報をどうすればいいかということですね。今回の事業を見ても全国9クラブでそれぞれのやり方がありました。やり方の提示も大事ですが、この活動に関わることによつ

てつくられる共生社会のビジョンなども含めた広報・情報発信が必要なのではないかと。

松尾 情報発信は分かりましたが、共生社会とはどうつながるのですか？

戸沼 ビジョンを共有して、創造しましょうということですね。2020年の東京オリンピック招致のプロモーションビデオもそうですけど、スポーツを「手段」として創造されたものをクローズアップして出すようにどんどんなってきたと思いますよ。企業の広報戦略もデジタル戦略もどんどんそちらの方向にいつているので、何か新しいことをやるのではなく、すでにあるいいものをつなげていく編集力と広報力だと思います。今一番必要なのは広報・伝達だと思います。

松尾 大日方さんは今のお話を聞いていかがですか？

大日方 私は都内に住んでいるのですが、東京の特性というのでしようか、なかなか地域でつながりにくいですね。総合型クラブがあるというのには知られていても、実際にどのように入ればいいのか

かという最初の働きかけが難しいです。しかし、日常の中で情報としてどんな活動をしているのかが見えてくれば、そこに行ってみようというきっかけになります。そういったきっかけづくりと情報発信が必要だと感じます。

戸沼 早速、ガイドブックを見た埼玉のクラブからSELFに問い合わせの連絡がありました。

大日方 それがいいですよ。すごく難しく考えるとできなくなるケースもあると思うので、やればできる、その気になればというのが運営のクラブマネジャーにとつて必要な力だと思います。みんなをその気にさせる、あるいはみんなが考えていることを引き出す力ですね。

増田 今回のモデル事業の際に、ガイドブックに参加者の写真が載った場合、肖像権の問題が出たらどうしようと考えました。電話やメールで済ませることも可能ですが、一軒一軒家を回って了解をもらうのが大事なことだと思いました。多分、そういう行動をとろうと自分を突き動かす情熱が必要なのだと僕は思っています。

5 2020年パラリンピックの開催と 総合型地域スポーツクラブの使命・期待

自立したクラブ運営が これからの大きな課題

松尾 これからの総合型地域スポーツクラブの使命と期待についてお話をください。

増田 今回、モデル事業をするに当たって「対象をどうしますか」と指導者の方々に聞かれた時、「どなたでもです」と答えました。すると、「それは厳しいんじゃないですか」と言われました。しかし、しつぎしつぎとしては「どなたでも」というのを大事にしています。対象者を限定したことによって参加希望者にお断りするのには絶対に嫌だったので、そこは譲らなかつたところ。しつぎしつぎの使命としては、子ども、若者、シニア、障がいのあるなしにかかわらずどなたでも受け入れていきたいのです。

2020年に向けては、パラリンピックを開催するからといって競技者の方だけにスポットライトが当たっていただければいいのかという、実はそうではないのが地域、街だと思っています。2020年までつながっていてそれ以降は途切れてしまうという関係にはしたくないですし、つながり続けることが大事だと思っています。先

にいろいろなことが生まれてくるからです。それは時間も手間もかかることですが、手間暇をかけるのを大切にしたいですね。なぜそう思うのかというと、シニアさんと一緒に太極拳などのプログラムをやっていると、

皆さん手間暇かけてやっているのが見えるからです。そういったプログラムと一緒にやることで、僕自身もシニアさんたちに成長させてもらっているという意識がすごく強くあります。多様な人のつながりの中で生きていくからそういう感性は磨かれていくのだと思うし、気付くことでもあるのです。ですから、街に暮らす人みんなであつていくということを大事にしていきたいと思っています。

戸沼 総合型地域スポーツクラブの使命は、情熱を絶やさないためにきちんとした運営・経営をすることです。思っただけでやるのは、何も補給しないでマラソンをして途中で倒れてしまうのと同じことなのです。そういうことではなくて、ちゃんとした靴や服、食べ物



増田康太

が必要。はっきり言って資金、自主運営、自立、これが総合型地域スポーツクラブの絶対的な課題になっていきます。

確か地方創生の中でLM法人（ローカルマネージメント）の設置が検討されていますよね。その中に福祉分野があり、投資が受けられるようになるそうです。正にスポーツが突破口になるのではないのでしょうか。

スポーツを通じて、そういった福祉や、地域づくり、社会づくりができるのだということ。2020年までに形として見せることです。今、その波がきているので、これからの5年間でその波をうまく活用できればいいと思うんです。それがこの5年間に我々がやるべきことです。障がい者スポーツをきっかけに経営・運

営を今一度考えて、我々が思い描いている炎を絶やさずにトーチをつないでいく。そのトーチをつくるのが我々のやるべきことだと思います。

松尾 障がい者スポーツという点ではいかがですか？

戸沼 スポーツそのものもそうですが、近視眼的に見るのではなくてもう少し多様な価値観で世界を見てみる。そうするとこれまでですであつたものが、「これもつながる」、「これもできる」というふうにとんどん出てきます。

松尾 一番いい波がきているこの5年間に、それをきちんとつかんでいくことが重要ですね。

戸沼 それは経営者としても必要な感覚だと思います。

菊地 これから100年続くクラブ運営をしていくためには、やはり魅力あるクラブにしなければいけません。会員さんが楽しみに来てくれるように、クラブマネージャーも経営側も会員さんもみんな魅力のある人であれば、人を引き付けることができます。そういうクラブにしていくなにも、障がい者スポーツも含めて一つにならないければいけないと思っているんですね。

それに僕は障がい者という言葉自体がなくなつてほしいと思っています。よく言うんですけど、目がだんだん悪くなつてきて眼鏡をかけるのも障がいを持っているこ

とだと。たまたま眼鏡という道具があるから普通に生活しているわけ、それとまったく同じだと思

うんですね。そういう世界をつくらべていきたいですし、そういうクラブにしていきたいです。オリンピックレガシーとして、オリンピック・パラリンピックが終わった2020年以降はそういうクラブにしていこうと強く思っています。

クラブとしてもそこを大きくアピールするため、オリンピックの現場で開会式のサポートや行進の先導などで、障がいを持つ方々にたくさん活躍してもらいたいですよ。日本体育協会を含めて、東京都にもJOCにもこれからお願いしようと思っています。

スポーツに関わっても関わらなく



戸沼智貴



菊地 正

CLUB for ALL 地域スポーツクラブへの障がい者スポーツ導入 (ガイドブック)



全国に約3,500ある総合型地域スポーツクラブの中から、地域性や障がい者スポーツへの取り組み実績の有無を勘案して9クラブをモデルクラブに選定。本冊子は、今回の事業活動を通じて浮かび上がってきた実践のためのヒントや課題などを総合型クラブ向けのガイドブックにまとめたもの

でも、障がいを持っていたとしても、前向きな人たちがどんどんオリンピックやパラリンピックに参加する。そしてオリンピック・パラリンピックを見事に成功させて、関係づくりを進めていく。そういったことを総合型クラブが中心となつてできる世の中をつくってほしいと大きな夢として考えています。ぜひ、関係の先生方、皆さん忘れないでください。絶対にやりたいと思つていきますから。

6

総合型地域スポーツクラブのこれから。お互いを支え合う力



松尾哲矢

大日方邦子

2020年のレガシーは共に在ることが当たり前前の世の中に

松尾 今まで皆さんの話をお聞きになって、大日方さんご自身のお考えを含めてコメントをいただければと思います。

大日方 「パラリンピックには社会

を変える力がある」という言葉があります。社会を変えるというのはどういうことかと考えた時、日本で今一番変えなければいけないのは、ある一つの視点において障がいのある人は別の存在だという見方です。いわゆる健常者と障がい者を分けることをやめて、みんな同じですと考えるように、2020年の大会を通じてやれるといいなと思っています。

そして、その先に見える社会というのが地域だと思うのです。結局、一人一人が暮らしている自分たちの地域の中に、眼鏡をかけた人もいる、高齢者もいる、若者も子どももいる。多様な社会がここにあるのだということを、理念ではなくて肌感覚として当たり前になるということなんです。

オリンピック・パラリンピックが終われば街は静かになり、街も随分変わると思います。その時に日本中のそれぞれの地域で、何か当たり前になったことがあるよねと、それがレガシーだと思うのです。

レガシー教育に関する議論が今、盛んにされ始めています。1964年の東京オリンピックのレガシーって何だろうと考えた時、例えば、「ツバを街の中で吐かないようにしましょう」というマナー

を伝えたり、「ルールを守りましょう」というようなことですね。

今となっては当たり前なことが当時、日本全国津々浦々に広がったのと同じように、自分たちの地域にはいろいろな人が住んでいるということが伝わるのが一つのレガシーだと思っています。そうなった時に、何でそれを体験できるのかというと、一つはスポーツだと私は思います。

スポーツと言うと競技に目がいきがちです。しかし、総合型地域スポーツクラブが目指すものは、スポーツを通じた地域のつながりをつくっていくことです。できればそういう中からオリンピックをを目指したい人、パラリンピックをを目指したい人を地域で支え、応援できればいいですね。自分の地域からトップアスリートが出た時に応援したいという一つの土台となればと思います。それは団体の選手でもいいです。何かを一生懸命やっている人を応援する形で、みんなの気持ちがつながっていくハブの一つとして総合型地域スポーツクラブがなってくれればいいと思います。

経営が難しいということは皆さんおっしゃいます。気持ちだけが空回りして、思いだけではできないというのも一方にはあります。

そこを支えてくれる人を増やしていく努力、新しくファンをどんどんつなげていくことがクラブマネージャーの方たちには求められているところですね。

地元だけで完結するのではなく、クラブとクラブでつながり合い、情報を取っていくことで、経営というところでも力になると思います。

松尾 皆さんのお話を聞いていて2つのことを申し上げたいと思います。これからの動きの中で大日方さんが2020年のパラリンピックのレガシーとは何かといった時に、当たり前という感覚がどこで生まれていくのかとおっしゃいました。すべての人たちがその人らしくスポーツを楽しめる時代、これを「成熟社会のスポーツ」と呼ぼうと私は思っています。そして、やっとその扉が開かれました。しかしながら障がい者の日常のスポーツを支える環境はまだ整っていないとは言えません。そういった意味で言うと今こそ障がいの有無に関わらず、すべての人がその人らしくスポーツを楽しめている日常の風景が、2020年に向けて当たり前になっていくということ、本気になってやっていかねばいけない時なのです。

例えば、1964年に開催された東京オリンピック直前の1963年にスポーツ少年団をつくり、その5年前には体育指導委員という仕組みをつくって広めてきました。ある意味それが当たり前になったのです。そして、これから動いていく中で総合型地域スポーツクラブの役割は、極めて大きいのです。例えば、明治期以降、学校制度が整っていくに伴って、教育の効率化という視点で障がいのある子とない子を分けて教育することが一般化してしまいました。その結果、子どもたちは障がいのある子を見たことがない。車イスをつくられてきました。しかし、総合型地域スポーツクラブで子どもたち同士が交流すれば、共に在ることが当たり前になります。それができるのが総合型地域スポーツクラブだと思えます。そういうことを担いながら、みんなが時代とともに生きていこう、共生社会を実現しようじゃないかという、大きなビジョンを抱えながらやっていくことが大切だと思います。

次に2つ目です。江戸時代に、俳諧等のサークルが多数あったそうです。土農工商という身分制度があった時代に、武士や農民もいれば、女性も男性も

いるというサークルが山ほどあったと言います。そして、小さな村で俳諧のコンクールをすると、4000も5000も集まってきた。トップは女性で次は農民、次は武士というようにことがたくさんありました。日本においてはそれが時代をつくっていくネットワークとして非常に重要でした。

士農工商という強いネットワークがあり、その次に血縁のネットワークとしていわゆるサークルが、社会の中で非常に重要な役割を果たしてきました。オープンな情報伝達に優れ、友が友を呼んで、サークルが時代をつくり、江戸時代を支えました。

しかしそれが、江戸、明治、大正、昭和、平成と流れてきた中で、平等社会と言いながらも、老若男女、障がいがあるなし等によってカテゴリー化され、関係もカテゴリーの中でつくられることが多く、孤立化の問題も生み出してきました。それをもっと大きなネットワークとしてつなぎ直していこうというのが総合型クラブの理念だと思っています。ですから、我々がやるうとしていくことは、最近突然始めたことではなく、歴史的に日本が培ってきたオープンなネットワーク、

一つのシステムをもう一度つくり直そうという運動なのです。今こそ踏ん張って時代を担うということを感じながらしっかりと進めていかなければいけないし、正にそういう時代がきています。その中心になるのが総合型における障がい者スポーツの考え方、「みんないていいんだよ」という空気感と実感、それが2020年の当たり前になった世界がつけられるかどうかがかかっています。

皆さんのお話を聞きながら、「頑張れ総合型！」をメッセージにしたいと思いました。

耳より情報 ガイドブックがダウンロード可能に！



座談会でご紹介した「地域スポーツクラブへの障がい者スポーツ導入」(ガイドブック)は、pdfデータとしてすべてのページが公開されており、どなたでも見る事ができます。お手元にガイドブックのない方は、次の日本レクリエーション協会のホームページよりダウンロードしてください。事業の実施をした9つのクラブも紹介されています。

<http://www.recreation.or.jp/business/sports/possibility/club4all/>